Kobe Shoin Women's University Repository

Title	同時バイリンガルの子どもの日本語語彙の一時的喪失についての検討の試み A Tentative Analysis of Temporary Attrition of Japanese Vocabulary in a Simultaneous Bilingual Child
Author(s)	久津木　文（KUTSUKI Aya）
Citation	神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin , No.15 : 27-36
Issue Date	2012
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

同時バイリンガルの子どもの日本語語彙の一時的喪失についての検討の試み

久津木 文
神戸松蔭女子学院大学 人間科学部
ayakutsuki@shoin.ac.jp

A Tentative Analysis of Temporary Attrition of Japanese Vocabulary in a Simultaneous Bilingual Child

Aya KUTSUKI
Kobe Shoin Women's University Faculty of Human Sciences

Abstract

バイリンガルの子どもの語彙の変化は大きく、ちょっとした言語環境や入力の変化で大きく影響を受ける。先月まで日本語で話していた子どもが今月にはまったく話せなくなっているということも全く珍しいことではない。大人の場合でもしばらく外国を使う機会がないと忘れてしまう。特に語彙の中でも具象性が高いものが低いものよりも喪失されやすいことが成人の言語処理、第二言語習得研究、および幼児の言語獲得のデータから示唆されている。同じようなことが幼児の同時バイリンガルの語彙の喪失でもいえるのだろうか。本稿では、この疑問に答えるためバイリンガルの子どもの一時的な日本語語彙の喪失を分析する。

Even a little change in linguistic input or environment would cause drastic changes in vocabularies of bilingual children. It is not unusual to see a bilingual child who now barely speaks Japanese was in fact highly fluent in it last month. Adults also forget a foreign language if they do not have opportunities to use it for a length of time. From the findings from adults' language processing, second language learning and child language acquisition studies, it has been suggested that of the different word types, the ones that have high concreteness are relatively easier to be learnt than the ones with lower concreteness. Can we say the same about word losses (attritions) in a simultaneous child bilingual? This paper tries to answer this question by analyzing Japanese words suffering attrition in a bilingual child.

Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin, No. 15, 27–36, 2012.3.
神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 No. 15, 27–36, 2012.3.

キーワード: 言語習得、バイリンガル・レキシコン、具象性、言語喪失
Key Words: acquisition, bilingual lexicon, concreteness, language loss

1. はじめに

本稿は久津木 (2011) のバイリンガル児の語彙データをもとにしたものである。久津木では 29ヶ月から 45ヶ月の間の一人の英語と日本語の入力を受けて育つバイリンガルの子どもの語彙を標準化された質問紙である MacArthur Bates Communicative Development Inventory 及び日本語版であるマッカーサー乳幼児言語発達質問紙を用いて調べるのと同時に、対象である子どもの言語入力環境を親の言語使用スタイルや環境で起こった出来事等を調べ、二言語の語彙の変化と言語入力環境の変化との関係について予備的な検討を行った。その結果、いくつかのことが明らかとなった。対象となった子どもの言語入力が大幅に英語に偏っていたため、どの時点においても英語のほうが日本語よりも相対的に優勢でありどちらの言語の発達年齢もモノリンガルと比べ低いということが判明した。さらに、周囲における英語使用の増加という言語環境の変化に子どもの日本語能力が影響を受け、理解・産出語彙とも減少、つまり、一時的な喪失が認められることも判明した。この喪失を受け、両親は日本語の入力を増やそうと戦略的に入力を調整するようになることも判明し、乳幼児期のバイリンガルの子どもの能力と環境がダイナミックに影響していることを捉えることができた。本稿では、久津木で扱われたバイリンガルの子どものデータを再分析をし、特に一時的な日本語の「喪失」の現象を明らかにする。

言語喪失についての研究の多くは過去 20 年間に行われたものが主である。脳損傷によるものや社会言語学的なレベルでの形式やアクセントの喪失といったものも広義での言語の喪失ではあるが、二言語獲得 (習得) における言語の喪失という意味で言語喪失という言葉を使うことにする。二言語同時獲得のバイリンガルの幼児の言語獲得や学習は臨界期後や母語がある程度成立してから第二言語学習とは質的に大きく異なる可能性がある。しかしながら、外国語学習者の第一、もしくは第二言語の喪失について簡単に言及する (詳細なレビューについては Yukawa (1988) や Taura (2005) 等を参照されたい)。言語学習者がなんらかの理由（移住等）で知っている二つの言語の中の一つをあまり使用しなくなったときその言語は喪失の危機に陥る。言語の喪失が確認されている言語領域は、読み・書き・話す・聞くといったスキルや、語彙・音韻・統語・形態といった言語領域に分けられる。様々な研究者が各々の手法を用いて異なる性質の学習者を調査しているためどのような学習者がどのような喪失を経験するのか、もしくはしないのか、といったことについての共通の見解は殆どないようである。本研究では、まだ文章をつくらない幼児の語彙についてのデータを質問紙を用いて収集した為、上記の言語領域のうちの「語彙」のみが対象となる。

さらに、スキルについても「話す」と理解する能力を含めた「聞く」のみが使用した質問紙に対応したスキルであり分析の対象となる。語彙は他の統語や形態といった言語の要素よりも構造化されておらず自由であることから喪失されやすい (Selinger, 1991) と考えられている。さらにマクロな視点からみても言語接触によって語彙がまず喪失され

ることからも、語彙が脆弱な要素であると考えられるだろう。果たして全ての語彙は同じように喪失に対して脆弱なのだろうか。バイリンガルの語彙喪失とその種類についての研究は少ないが、二言語処理の過程や記憶についての研究から (以下は筆者訳)「学ぶのが難しいものほど忘れやすい」 (de Groot & Keizer, 2000, p.1) といわれている。つまり、語彙の中でも具象性 (concreteness) が高いものや母語の単語に似た形式をもつ同根語 (cognates) が学習されやすく、保持もされやすいため[1] 喪失に対して強いといのだと考えられる。第一言語獲得の知見から獲得のしやすさと語彙の具象性の高さを考えると、実際複数の研究において、子どもにとって具象性の低い「動詞」の学習は難しいことが示されている。これらのことから、喪失に対する脆弱性と語彙の具象性には関係があると考えられ、語彙の中でもより具象性の高い「名詞」は「動詞」や「形容詞」等と比べ喪失に対して強いと考えられる。[2] その一方で、「間投語」、「フィラー」、「定型表現のかたまり」といった語用論的な役割を担う要素は喪失されにくいこと (Wray, 2000) が報告されている。確かに、成人の学習者やバイリンガルのコードスイッチング、そして非意図的なミキシングに現れる語彙や表現を思い浮かべると「えっと」、「うーん」といった人との会話の中でとっさに出てきてしまうような表現はなかなか失われることがなさそうであるし、人とのやり取りや状況において決まりきった文句（例えば「いただきます」）なども忘れることはないだろう。

しかしこれらの見解や先行研究は臨界期以降の学習者や成人バイリンガルを対象にして得られたものであり、二言語を同時に獲得している幼児がどのような喪失を経験するのかについての資料は非常に少ない。

本稿では、日本語の語彙に一時的な現象がみられたはじめた時期である 37ヶ月時点でのデータを中心にその前後である 35ヶ月及び 41ヶ月時点のデータを含めた三時点でのデータをもとに日本語語彙の喪失の内容を明らかにする。

2. 方法

方法は久津木 (2011) と同じであるが再度下記に示す。

2.1 対象者

日本の K 市に住む北米出身の英語を母語とする父親と日本出身の日本語を母語とする母親の夫婦に生まれた男児 L。[3]

[1]同根語の処理がそうでない単語よりも速い理由が言語毎に記憶領域が独立しているからか、類似性によって記憶へのアクセスが促進されるからなのかは未だ議論の余地があるようであるが、言語間で類似した単語は学習されやすく忘れられにくいのは確かなようである。

[2]通時的な品詞カテゴリに関係なく感情を含む単語 (emotion-laden words) の処理は対訳とされている単語同士の間でも、感情の高揚や喚起が異なるはずだとされており、具体語、抽象語とは別に第三の語彙カテゴリを形成するという考え方がある (Pavlenko, 2008)。

[3]対象となった子どもの個人情報を遵守しつつ研究に必要な情報のみを記載している。

2.2 言語環境

両親の母語は異なるが、ほぼ家庭内一言語 (英語) で育てている様子。41ヶ月から英語のプレスクールに通うようになるがそれまでは家庭内で過ごす 5 歳上の兄はインターナショナルスクールに通っており、英語を主に話す。

2.3 手続き

L の両親に調査依頼し、下記に解説する言語発達質問紙を郵送で配布し記入後返送してもらった。L が 29ヶ月の時点から 45ヶ月の間 9 回実施。9 回の実施時期は次の通りであった：29ヶ月、30ヶ月、32ヶ月、33ヶ月、34ヶ月、35ヶ月、37ヶ月、41ヶ月、及び 45ヶ月。この中でも日本語語彙の減少がみられた 35, 37, 及び 41ヶ月の時点のデータのみを本稿では分析の対象とした。

2.4 質問紙

2.4.1 言語発達質問紙

英語版 MacArthur-Bates Communicative Development Inventory: Words and Sentences (Fenson, et al. 1992) 及び日本語版は『日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と文法」』(綿巻・小椋, 2004) を用いた。理解語彙のチェック欄はないが、理解を調べるために理解がある場合はチェックを入れるよう指示した。

2.4.2 言語環境についてのアンケート

母親・父それぞれに対してどのようにお互いに会話をし、どのように子どもに話しかけているか、そして生活にどのような変化があったか等について尋ねる項目を含んだアンケートを作成し上記の言語発達質問紙と同時に郵送・回収した。

3. 分析と結果

3.1 言語環境と総合語彙数の変化

35, 37, 41ヶ月は L の言語環境に大きな変化が起こった時期である。アンケートによる聞き取りからわかっていることは保護者からのコメントを含めまとめると次の通りである。

＜ *35*ヶ月＞ 家庭内で日本語母語話者である母親とほとんど過す。英語は文章を作り始めている。(言語使用比率：母親 (英語 90%, 日本語 10%), 父親 (英語 90%, 日本語 10%))。

＜ *37*ヶ月＞ 上の兄が夏休みになり家庭にいる時間が長くなる。兄が日本語で話しかけることが増えるが、近々帰省で北米に帰る。(言語使用比率：母親 (英語 95%, 日本語 10%)、父親 (英語 95%, 日本語 10%))。

＜ *41*ヶ月＞ 英語プレスクールの開始。質問紙記入の直前 6 週間、北米に滞在し、日本語を話す機会も聞く機会も減り、すっかり忘れてしまった様子。(言語使用比率:母親 (英語 100%)、父親 (英語 100%))。

この時期の総合語彙数を図 1 として示した。英語語彙はこの期間、順調に増加しているが、日本語語彙については 35ヶ月をピークにその後減少しているのがわかる。三時点で総合語彙数は次の通りである。35ヶ月：理解 (88 語)、表出 (87 語)、37ヶ月:理解 (81 語)、産出 (57 語)、41ヶ月：理解 (42 語)、産出 (42 語)。35ヶ月から 41ヶ月の間に半分程に理解・産出ともに語彙数が減少している。χ 二乗検定の結果、[4] 総合産出語彙数はこの三時点の間に差があることが認められた ($\chi^2(2) = 17.47$, $p < .01$)。多重比較の結果 (Ryan 法 $\alpha = .05$), 35ヶ月と 37ヶ月時点での総合語彙数と比較して 41ヶ月時点での語彙数は有意に減少していることが判明した ($p < .001$)。

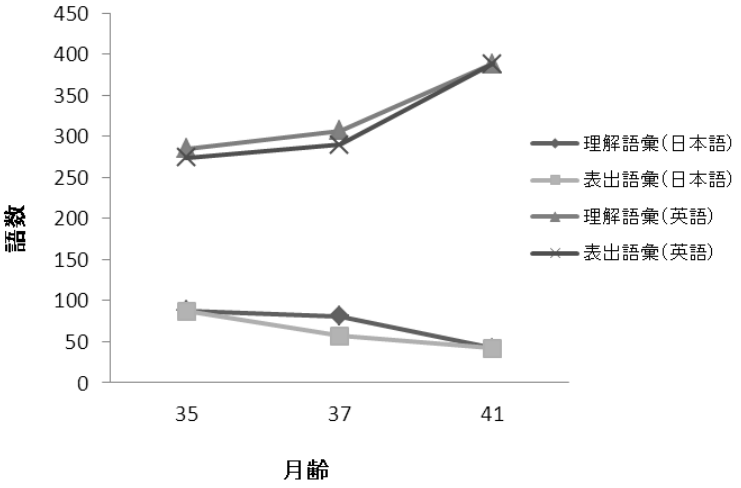

図 1: L の三時点での総合語彙数の変化

3.2　語彙の種類

『日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と文法」』(綿巻・小椋, 2004) は二部構成であるが、第一部の「ことば」でチェックされる語彙により語彙発達年齢が算出されるため第一部の項目のみを分析の対象とした。第一部を構成する下位項目の語彙の種類には 24 種ある。表 1 (p. 32) に下位項目の一覧と語彙の例を示した。先に述べたように語彙喪失の要因としてまず考えられるのが語彙の具象性であり、品詞によって具象性は異なる。よって、まず、動物、乗り物といった名詞を含む下位項目 1~11 を「具象性の高い名詞」としてまとめた。続いて、項目 12, 13 は動作語彙とようすや性質を表す語彙、つまり動詞と形容詞であるので、これらを抽象性の高い語彙という分類にまとめた。さらに、14, 15, 16, 17, 及び 18 は名詞や形容詞、動詞などとは性質の異なる語彙の群で、人との会話、やりとりの中で用いられる語彙として分類した。これら以外のものについてはその他として分類した。

[4] これ以降の χ 二乗分析についても多重比較にはすべて Ryan 法 ($\alpha = .05$) を用いた。

表 1: 『日本語マッカーサー乳幼児発達質問紙』の下位カテゴリと語彙の例と本研究での分類

	下位項目名	分類	語の例		下位項目名	分類	語の例
1	動物	名詞	アヒル、パンダ	12	動作語	（抽象性の高い語）	あがる、あける
2	乗り物	（具象性の高い語）	車、自転車	13	ようす・性質		青い、赤い
3	おもちゃ		絵本、えんぴつ	14	日課とあいさつ	やりとりの語	ありがとう、いただきます
4	食べ物と飲み物		アイスクリーム、あめ	15	会話語		あっ、あのね
5	衣服		エプロン、くつ	16	質問		いつ、だれ
6	体の部分		あご、足	17	接続語		そして、だから
7	家具と部屋		いす、エアコン	18	その他		あった、おいで
8	ちいさな家庭用品		アイロン、絵	19	幼児語	その他	あーあっ、あいた
9	戸外のもの		雨、石	20	幼児語２		えんえん、おてて
10	おでかけ		いえ、おそと	21	位置と場所		あいだ、うえ
11	人々		赤ちゃん、運転手	22	数量		いち、いちばん
				23	時間		あさ、あした
				24	代名詞		あそこ、あっち

3.3 語彙の種類と喪失の関係についての分析

3.3.1 名詞における喪失

三月齢における名詞 11 種類の理解及び産出語彙の変化を表 2 (p. 33) にまとめた。三時点での理解及び産出語彙数を下位項目別、総合語彙数を χ 二乗分析もしくは正確適合度検定にかけたが、[5] 有意な差はみられなかった (全て $p > .05$)。つまり、名詞はあまり喪失されなかったことがいえる。

3.3.2 抽象性の高い語彙における喪失

抽象性の高い語彙として分類した動作語彙、ようす・性質を表す語彙の理解・産出語彙数を月齢比較した (表 3, p. 34)。その結果、動作語彙つまり動詞は理解及び産出双方において 42ヶ月で語彙数が少ないことが判明した。これはつまり 42ヶ月で顕著な喪失があったといえる。ようすや性質を表す語彙は正確確立検定により、産出においてのみ月齢間で違いがみられ ($p < .01$), 中でも 35ヶ月から 37ヶ月にかけて有意な減少がみられた ($p < .001$)。抽象性の高い動詞と形容詞を統合した場合の比較では、動詞の変化同様、42ヶ月で有意な減少が認められた。

3.3.3 やりとりの語における喪失

人との会話ややりとりで用いられる表現や語であるやりとり語の月齢変化を分析した結果、表 4 (p. 34) のような結果が得られた。

全体的に各項目とも 42ヶ月で減少しているものの統計的な有意差は理解及び産出でみとめられなかった。接続語については 1 語も産出または理解がされておらず変化がなかった。

[5] 期待値が 5 以下のデータに関しては正確適合度検定 (exact test of goodness of fit) を用いた。

表 2: 三時点における名詞の理解・産出語彙数の変化の詳細

	下位分類	理解・産出	月齢 35	37	42	検定の結果
1	動物	理解	1	2	1	n.s.
		産出	1	2	1	n.s.
2	乗り物	理解	4	4	1	n.s.
		産出	4	4	1	n.s.
3	おもちゃ	理解	4	3	1	n.s.
		産出	4	3	1	n.s.
4	食べ物と飲み物	理解	10	11	10	n.s.
		産出	10	11	10	n.s.
5	衣服	理解	5	3	3	n.s.
		産出	4	3	3	n.s.
6	体の部分	理解	0	0	1	n.s.
		産出	0	0	1	n.s.
7	家具と部屋	理解	4	5	4	n.s.
		産出	4	5	4	n.s.
8	小さな家庭用品	理解	1	3	1	n.s.
		産出	1	3	1	n.s.
9	戸外のもの	理解	1	0	0	n.s.
		産出	1	0	0	n.s.
10	おでかけ	理解	1	1	2	n.s.
		産出	1	1	2	n.s.
11	人々	理解	6	4	8	n.s.
		産出	6	4	8	n.s.
	名詞	総合理解数	37	36	32	n.s.
	名詞	総合表出数	36	36	32	n.s.

n.s.=not significant, p<.1†, p<.05*, p<.01**

但し、やりとりの語全体では理解語彙は 42ヶ月で有意に減少し、産出語彙数は 35ヶ月と 37ヶ月では有意差がないものの、35ヶ月と 42ヶ月を比較すると減少していることがわかった。

3.3.4　その他の語における喪失

最後になるがその他の分類 (表 5, p. 35) は、ここまでに解説してきた分類以外のものをまとめた便宜上の分類である。よってここに属する下位項目を総合数としてまとめることはしない。さらに、ここに属する下位項目の理解・産出語彙数は概して低く、減少や喪失の現象をみる段階ではないことがわかる。

4.　おわりに

本研究では、バイリンガルの子どもの日本語語彙の変化をもとに、喪失されやすい語彙がどのようなものであるかを調べた。外国語学習及び、言語処理、言語発達の観点から示唆されていたとおり、具象性の高い名詞は喪失されていなかった。これに対して、抽象性の高い語彙、中でも特に動詞では喪失が認められた。形容詞に関しても同じ傾向がみられたが産出のみのレベルであり、理解のレベルにおいては有意な喪失がなかった。こ

表 3: 三時点における抽象性の高い語彙の理解・産出語彙数の変化

	下位分類	理解・産出	月齢 35	37	42	検定の結果
12	動作語	理解	10	10	0	x2(2)= 10.00**, 35&37>42 **
		産出	10	9	0	x2(2)= 9.58**, 35&37>42 **
13	ようす・性質	理解	7	5	1	n.s.
		産出	7	0	1	exact test**, 35>37**
	抽象性の高い語	総合理解数	17	15	1	x2(2)= 13.82**, 35&37>42**
	抽象性の高い語	総合産出数	17	9	1	x2(2)= 14.22**, 35>42**, 37>42*

n.s.=not significant, p<.1†, p<.05*, p<.01**

表 4: 三時点におけるやりとりの語の理解・産出語彙数の変化

	下位分類	理解・産出	月齢 35	37	42	検定の結果
14	日課とあいさつ	理解	15	15	6	n.s.
		産出	15	14	6	n.s.
15	会話語	理解	5	5	1	n.s.
		産出	5	0	1	n.s.
16	質問	理解	3	1	0	n.s.
		産出	3	0	0	n.s.
17	接続	理解	0	0	0	n.s.
		産出	0	0	0	n.s.
18	その他	理解	5	4	1	n.s.
		産出	5	0	1	n.s.
	やりとりの語	総合理解数	28	25	8	x2(2)= 11.44**, 35&37>42**
	やりとりの語	総合産出数	28	14	8	x2(2)= 12.64**, 35>42**

n.s.=not significant, p<.1†, p<.05*, p<.01**

れらを総括すると名詞は殆ど喪失せず、形容詞は産出のみ、そして動詞は理解及び産出の両方ともが喪失したことになり、言語獲得中の子どもの語彙の中でも具象性の程度が語彙が忘却されるか保持されるかに多大な影響を与えている可能性があることがわかった。しかしながら、成人の学習者は語用論的な役割を担う表現等をあまり失わないのに対して、本研究では社会的なやりとりの語も喪失したことが判明し、これは予想とは異なっていたが、おそらく理由としては次のようなことが考えられる。人とのやりとりの表現が残りやすいのは、場面や状況と語や表現とがセットになっている場合であろう。しかし、対象となった子ども場合は、日本語よりも英語で長い時間を過ごしており、多少は知っていたやりとりの語についてもしっかりとした繋がりが形成されないまま忘れられてしまったのかもしれない。

幼児期、早期のバイリンガルの二言語の語彙の発達や様子について総合的な見解を求

表 5: 三時点におけるその他の語の理解・産出語彙の変化

	下位分類	理解・産出	月齢 35	37	42	検定の結果
19	幼児語	理解	4	1	1	n.s.
		産出	4	1	1	n.s.
20	幼児語2	理解	1	1	2	n.s.
		産出	1	0	2	n.s.
21	位置と場所	理解	0	0	0	n.s.
		産出	0	0	0	n.s.
22	数量	理解	2	2	0	n.s.
		産出	2	0	0	n.s.
23	時間	理解	2	1	0	n.s.
		産出	2	0	0	n.s.
24	代名詞	理解	2	3	0	n.s.
		産出	2	0	0	n.s.

n.s.=not significant, p<.1†, p<.05*, p<.01**

めるならデータを大幅に増やす必要があるが、同じような子どものデータを収集するのは非常に難しい。成人の学習者や二言語話者と異なり乳幼児期の二言語話者や使用者 (バイリンガル) の言語能力を捉えるのは非常に困難であるうえに、個人差が非常に激しい。今回の研究の対象となった子どものデータだけをとりあげても、言語発達的に似たような時期に似たような言語入力を得ている子どもを見つけ出すことは不可能に近い。しかし、バイリンガルにみられる幼児期の語彙の変動は非常に興味深く、語彙の処理や記憶についての資料になると考えられる。

文献

久津木文 (2011). バイリンガル児の言語量と言語環境の変化についての予備的検討. *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin*, 14, 15–22.

綿巻徹・小椋たみ子 (2004)『日本語マッカーサー　乳幼児言語発達質問紙「語と文法」』. 京都国際社会福祉センター.

De Groot, A. M. B. and Keijzer, R. (2000), What Is Hard to Learn Is Easy to Forget: The Roles of Word Concreteness, Cognate Status, and Word Frequency in Foreign-Language Vocabulary Learning and Forgetting. *Language Learning*, 50,1—56.

Fenson, L., Marchman, V.A., Thal, D.J., Dale, P.S., Reznick, J.S., & Bates, E. (1992). *MacArthur-Bates Communicative Development Inventories (CDIs)*, Second Edition. Paul. H. Brookes Publishing.

Pavlenko, A. (2008). Emotion and emotion-laden words in the bilingual lexicon. *Bilingualism: Language and Cognition*, 11(2), 147–164.

Selinger, H.W. (1991). Language attrition reduced redundancy and creativity. In Selinger, H.W. and Vago, R. M.(eds.), *Handbook of second language acquisition.* San Diego, Academic Press.

Taura, H. (2005). *Bilinguality and Bilingualism in Japanese School-Aged Children.* Tokyo, Akashi Shoten.

Wray, A. (2000). *Formulaic Sequences in Second Language Teaching: Principles and Practice*. Cambridge: Cambridge University Press.

Yukawa, E. (1998). *L1 Japanese Attrition and Regaining: Three case studies of two early bilingual children*. Tokyo, Kuroshio.

Author's web site: `http://www.shoin.ac.jp/`

（受付日: 2012.1.10）